

60 歳以上のアマチュア劇団かんじゅく座 第 13 回公演「方舟は飛沫をあげて」

第 117 号 2018 年 5 月 27 日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社ガガ 奥山卓矢

演出家あいさつ

今回の演目は、かんじゅく座第 4 回公演のリメイクです。主人公の
栄子が実家を処分するに当たって、1960 年代、70 年代の青春時代を
回顧するかたちで物語がすすみます。64 年の東京オリンピックの話題も出
てきますが、座員たちには、2 つのオリンピックを体験することになる世代
として、本読み段階から意見や提案を貰いながら、書き直し 作業を重ねま
した。

1964 年に 7 歳から 27 歳だった座員たちの言葉に含まれるあの時代への思
いは、年齢や住んでいた場所によって様々ですが、自分の思い出話をはじめ
ると、いつも以上に饒舌で、嬉々とした表情で話すのです。

とにかくたくさん言葉が飛び出しました。そして概して「あのころの日本
は、みんな元気だった」と振り返るのです。

一方、1973 年に生まれた私は、劇中で題材になっている「家」の処分に
いて、特別な思い入れがあり、稽古中にも自分の過去の記憶が鮮明によりみ
がえり、なんども目頭が熱くなりました。が、いよいよ涙が流れそうになる
と、いいタイミングで座員がセリフを忘れたり、全然違う 衣装で登場し
たり、とその都度、苦笑いにすりかえられてしまいました。

苦笑でも爆笑でも、笑いがある現場というのはいいものですが、それとは
裏腹に、加齢のハンディは切実です。「稽古場に来るだけで疲れる」「衣装を
着替えるだけでひと仕事」という声が聞かれるようになって、劇団の在り方
や、芝居創作期間、稽古の進め方などを、見直すことが増えています。例え
ば、「衣装を着替えるのが大変だから、家から来てきたい」などというビッ
クリ発言も、今後は「あり！」になるかもしれません。

そんな一般的な演劇の現場ではタブーなことを強いられても、なお私がかん
じゅく座を続けているのは、高齢者の演劇活動に様々な可能性と 社会性を



かんじゅく座オフィシャルサイト



QRコードからお願いします。